

## 武蔵野日曜集会 降誕節

## 預言の成就

――旧約聖書から（創世記、イザヤ書他）――

1977年12月25日

小池辰雄

キリストの最初の預言 枝・樹の芽・磐なる牧者 一箇の星・一條の杖 一人の預言者 キリストは天界の王者 神さまを義とする 神は夫で民は妻 我も汝を罪せじ ひとりの神を拝する 無者となる 「我を視よ」 キリストは我らの義 溶け込みを一如という 現代のキルケゴール 涙の預言者エレミヤ 甦りの生命を与える 聖者となつくるもの 聖者の本願 日本一流の坊さんたち 聖霊がくる約束 キリストへの預言 祈り

## 【創世記3】

15 又我汝と婦の間および汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置かん。彼は汝の頭を砕き汝は彼の踵を砕かん。

## 【創世記49】

8 ユダよ汝は兄弟の讃る者なり。汝の手はなんじの敵の頸を抑えん。なんじの父の子等なんじの前に鞠ん。9 ユダは獅子の子の如し。わが子よ汝は所掠物をさきてかえりのぼる。彼は牡獅子のごとく伏し牡獅子のごとく蹲まる。誰か之をおこすことをせん。10 杖ユダを離れず法を立る者その足の間をはなるることなくしてシロの来る時にまでおよばん。彼に諸の民したがうべし。……22 ヨセフは実を結ぶ樹の芽のごとし。即ち泉の傍にある実をむすぶ樹の芽のごとし。その枝ついに垣を踰ゆ。23 射者彼をなやまし彼を射、かれを悪めり。24 然どかれの弓はなお強くあり、彼の手の臂は力あり、是ヤコブの全能者の手によりてなり。其よりイスラエルの磐なる牧者いづ。25 汝の父の神による彼なんじを助けん。全能者による彼なんじを祝まん。上なる天の福、下によこたわる淵の福、乳哺の福、胎の福、汝にきたるべし。

## 【民数記略24】

17 我これを見ん、然ど今にあらず。我これを望まん、然ど近くはあらず。ヤコブより一箇の星いでん。イスラエルより一條の杖おこり、モアブを此旁より彼旁に至るまで撃破り、また鼓譟者どもを尽く滅ぼすべし。

## 【申命記18】

1 祭司たるレビ人およびレビの支派は都てイスラエルの中に分なく産業なし。……15 汝の神エホバ汝の中汝の兄弟の中より我のごとき一箇の預言者を



汝のために興おこしたまわん。汝ら之に聴くことをすべし。……<sup>18</sup>我かれら兄弟の中より汝のごとき一箇の預言者を彼らのために興し、我言をその口に授けん。我が彼に命ずる言を彼ことごとく彼らに告ぐべし。

### 【申命記33】

<sup>17</sup>彼の牛の首出ういじはその身に榮光さかえありて、その角は野牛の角のごとく之をもて国々の民を衝つきたおして直ちに地の四方の極はてにまで至る。是はエフライムの万々はマナセの千々なり。

### 【サムエル後7】

<sup>4</sup>其夜エホバの言ナタンに臨みていわく。<sup>5</sup>往きてわが僕ダビデに言え。エホバ斯く言う、汝わがために我の住むべき家を建てんとするや。<sup>6</sup>我はイスラエルの子孫ひとびとをエジプトより導き出せし時より今日にいたるまで家に住みしことなくして但ただ天幕と幕屋の中に歩み居たり。<sup>7</sup>我イスラエルの子孫と共に凡て歩める処にて汝ら何故に我に香柏の家を建てざるやとわが命じてわが民イスラエルを牧養やしなわしめしイスラエルの士師つかさびとの一人に一言も語りしことあるや。……<sup>14</sup>我はかれの父となり彼はわが子となるべし。彼もし迷わば我人の杖と人の子の鞭を以て之を懲こらさん。<sup>15</sup>されど我の恩恵めぐみはわが汝のまえより除きしサウルより離れたるごとくに彼よりは離るることあらじ。<sup>16</sup>汝の家と汝の国は汝のまえに永く保つべし。汝の位は永く堅うせらるべし。

### 【アモス4】

<sup>6</sup>……然るに汝らは我に帰らずとエホバ言給う

### 【アモス9】

<sup>11</sup>其日には我ダビデの倒れたる幕屋おこを興し、その破壊やぶれを修繕つくろいその崩れたるを興し古代の日のごとくに之を建てなおすべし。<sup>12</sup>而して彼らはエドムの遺余者および我名をもて称えらるる一切の民を獲えん。此事を行うエホバかく言うなり。<sup>13</sup>エホバ言う視よ日いたらんとす。その時には耕者たがやすものは刈者かるものに相繼ぎ……

### 【ホセア2】

<sup>19</sup>われ汝をめとりて永遠とこしえにいたらん。公義と公平と寵愛ただしき おおやけと憐憫いつくしみとをもてなんじを娶めとり、<sup>20</sup>かわることなき真実まことをもて汝をめとるべし。汝エホバをしらん。

### 【ホセア3】

<sup>1</sup>エホバわれに言給いけるは汝ふたたび往きてエホバに愛せらるれども転りてほかのもろもろの神にむかい葡萄の菓子おんなを愛するイスラエルの子孫のごとく、そのつれそうものに愛せらるれども姦淫をおこなう婦人をあいせよ。<sup>2</sup>われ銀十五枚とおむぎ一ホメル半をもてわが為にその婦人をえたり。<sup>3</sup>我こ



れにいいけるは汝おおくの目わがためにとどまりて淫行をなすことなく他の人にゆくことなかれ。我もまた汝にむかいて然せん。

## 【ミカ4】

3 彼衆多の民の間を鞠き強き国を規戒め遠き処にまでも然したもうべし。彼らはその剣を鋤に打ちかえその鎗を鎌に打ちかえん。国と国とは剣を挙げて相攻めずまた重ねて戦争を習わじ。4 皆その葡萄の樹の下に坐しその無花果樹の下に居らん。……5 一切の民はみな各々その神の名によりて歩む。然れども我らはわれらの神エホバの名によりて永遠に歩まん。

## 【ミカ6】

8 人よ彼さきに善事の何なるを汝に告げたり。エホバの汝に要めをたもう事は唯正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神とともに歩む事ならずや。

## 【エレミヤ14】

7 エホバよ、我儕の罪われらを訟えて証をなすとも、願くは汝の名の為に事をなし給え。我儕の違背はおおいなり。我儕汝に罪を犯したり。8 イスラエルの企望なる者その艱るときに救いたもう者よ、汝いかなれば此地に於て他邦人のごとくし、一夜寄宿の旅客のごとくしたもうや。9 汝いかなれば呆ておる人のごとくし救をなすこと能わざる勇士のごとくしたもうや。エホバよ汝は我らの間にいます。我儕は汝の名をもて称えらるる者なり。我らを棄てたもう勿れ。

## 【エレミヤ20】

7 エホバよ汝われを勧めたまいてわれ其勧めに従えり。汝我をとらえて我に勝ち給えり。われ日々に人の笑いとなり人皆我を嘲りぬ。8 われ語り呼わること暴逆残酷の事をいう。エホバの言日々にわが身の恥辱となり嘲弄となるなり。9 是をもて我かさねてエホバの事を宣ず又その名をもてかたらしといえり。然れどエホバのことば我心にありて火のわが骨の中に閉じこもりて燃ゆるがごとくなれば忍耐につかれて堪え難し。

## 【エレミヤ23】

5 エホバいいたまいは、視よわがダビデに一の義しき枝を起こす日來らん。彼王となりて世を治め栄え公道と公義を世に行うべし。6 其日ユダは救をえイスラエルは安に居らん。其名はエホバ我儕の義と称えらるべし。……9 預言者輩のために我心はわが衷に壞れわが骨は皆震う。且つエホバとそ  
の聖言のためにわれは酔える人のごとく酒に勝たるる人のごとくし。

## 【エゼキエル17】

22 主エホバかく言いたもう、我高き香柏の梢の一を取りてこれを樹え、そ



の芽の<sup>いただき</sup>巔より若芽を摘みとりて之を<sup>すぐ</sup>高き勝れたる山に樹ゆべし。23 イスラエルの高山に我これを植えん。是は枝を生じ果をむすびて榮華なる香相となり<sup>もろもろ たぐい</sup>。諸の類の鳥皆その下に棲いその枝の蔭に住まわん。24 是に於て野の樹みな我エホバが高き樹を<sup>ひく</sup>卑くし卑き樹を高くし、緑なる樹を枯らしめ枯木を緑ならしめしことを知らん。我エホバこれを言い之を為すなり。

## 【イザヤ9】

6 ひとりの<sup>みどりご</sup>嬰兒われらのために生れたり。我儕はひとりの子をあたえられたり。政事はその肩にあり、その名は奇妙また議士また大能の神とこしえのちち平和の君となえられん。7……万軍のエホバの熱心これを成したもうべし。

## 【イザヤ53】

3 かれは侮られて人にすてられ悲哀の人にして病患をしれり。また面をおいて避くることをせらるる者のごとく侮られたり。われらも彼をとうとまざりき。

4 まことに彼はわれらの病患をおい我儕の<sup>かなしみ</sup>かなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5 彼はわれらの愆のために傷つけられわれらの不義のために碎かれみずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし<sup>きず</sup>瘡によりてわれらは癒されたり。6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

## 【イザヤ57】

15 至高く至上なる永遠に<sup>とこしえ</sup>すめるもの聖者となづくるもの如此い給う、我はたかき所きよき所にすみ、亦こころ碎けてへりくだる者とともにすみ、謙<sup>へりく</sup>だるものの霊をいかし碎けたるものの心をいかす。

## 【イザヤ59】

21 エホバいい給くなんじの上にあるわが<sup>たまわ</sup>霊なんじの口におきたるわがことは今よりのち永遠になんじの口よりなんじの<sup>とこしえ</sup>裔の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし、わがかれらにたつる契約はこれなりと此はエホバのみことばなり。

## ●キリストの最初の預言

聖書の宗教は旧約を抜きにしては新約がなく、キリストも旧約の総決算として現れたわけですから、その意味において正に預言の成就であるわけです。

「キリストス」「マーシアッハ」「メシヤ」



即ち、

「膏注<sup>あぶら</sup>がれたる者」、「聖霊を注がれたる者」

というこの「キリスト」の預言がどのように旧約においてなされてきたか。その一端を私たちは今日、垣間見ながらこれをお迎えしたいと思います。

前に多少そういう角度からお話したことがある。それは1973年のクリスマス。『ハレルヤ』の第37号に「ガリラヤ湖」という題で書きました。ぜひこれは参考にしてください。それから『無者キリスト』の最初の「受肉」のところ。それをもう一遍読み返していただきたいと思います。

その「ガリラヤ湖」の場合と多少今日はちがった角度からいきたいと思う。創世記第3章15節に不思議な言葉がある。

「<sup>15</sup>又我汝と婦の間および汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨<sup>うらみ</sup>を置かん。彼は汝の頭<sup>かしら</sup>を砕き汝は彼の踵<sup>くびす</sup>を砕かん。」（創世記3・15）

謎のような言葉ですが、これはサタンの使いであるところの蛇の、サタンの頭が砕かれる。即ち、神の霊に逆らうところの霊は滅ぼされるという言葉で、これが預言というならば、サタンに対して打ち勝ったところのただ一人のひとという意味からして、キリストの最初の預言ということになる。預言というのは、それが語られるときには、どのような事態が展開してくるか、そのことは知らない。知っているのは神さまだけで、神さまはそういった謎のような言葉を時々、人を選んで語っておられるわけです。

### ●枝・樹の芽・磐なる牧者

その次に創世記49章10節。創世記49章というのは創世記の中で大事な章の一つですが、ヤコブの十二の族のことが出てくる。8節から、

「8ユダよ汝は兄弟の讃<sup>ほむ</sup>る者なり。汝の手はなんじの敵の頸<sup>くび</sup>を抑えん。なんじの父の子等なんじの前に鞠<sup>かがま</sup>ん。9ユダは獅子の子の如し。わが子よ汝は所掠物<sup>えもの</sup>をさきてかえりのぼる。彼は牡獅子のごとく伏し牡獅子のごとく蹲<sup>うずく</sup>まる。誰か之をおこすことをせん。10杖ユダを離れず法<sup>のり</sup>を立<sup>たつ</sup>る者その足の間をはな

（創世記49・8～10）

この10節の

「10杖ユダを離れず法<sup>のり</sup>を立<sup>たつ</sup>る者その足の間をはなることなくしてシロの来<sup>きた</sup>る時にまでおよばん。彼に諸<sup>もろもろ</sup>の民したがうべし。」

という、これも不思議な言葉です。そのようなユダの特別な使命。「諸の民したがうべし」という言葉が底流の一つとしてあるわけです。しかも、22節にきまして、

「22ヨセフは実を結ぶ樹の芽のごとし。即ち泉の傍<sup>かたわら</sup>にある実をむすぶ樹の芽



のごとし。その枝ついに垣を踰ゆ。

と。アブラハム、イサク、ヤコブそれからヨセフです。ヨセフがやがてこの選民の中心になる族ですけれども、

「実をむすぶ樹の芽のごとし」

と。このような言葉はやがて預言者エレミヤにも出てくるし、それから新約の黙示録の終わりの方に出てくるわけですが、そのようにキリストの生命の水、霊水というものがここに隠れて預言されているわけです。それから、

<sup>23</sup>射者彼をなやまし彼を射、かれを悪めり。<sup>24</sup>然どかれの弓はなお強くあり、彼の手の臂は力あり、是ヤコブの全能者の手によりてなり。其よりイスラエルの磐なる牧者いづ。

この

「其よりイスラエルの磐なる牧者いづ」

という言葉。イスラエルの岩、あるいは「躓きの岩」と言われる。また、

「我は牧者なり」

という、キリストにやはり関わっているところの大事な言葉であります。

<sup>25</sup>汝の父の神による彼なんじを助けん。全能者による彼なんじを祝まん。上なる天の福、下によこたわる淵の福、乳哺の福、胎の福、汝にきたるべし。」  
(創世記49・22〜25)

と、非常に祝福された言葉がそこに連なっている。創世記49章にはそういった十二の族、特に中心になっているユダとヨセフです。

本当の力を持つている――まあ、「獅子」という動物で例えられているのは多少我々にピンときませんけれども、とにかく――力の象徴としてです。力の象徴としての「力ある者」ということと、それから神に本当に従うという「羔」という、その画面が、キリストが本当に王者でありまた僕であるということの比喩的な表現として、「獅子」と「羊」が出てくるのもおもしろいことです。

### ●一箇の星・一條の杖

それから、民数記略24章17節。ここにやはりヤコブの族のことが出てまして、

「<sup>17</sup>我これを見ん、然ど今にあらず。我これを望まん、然ど近くはあらず。ヤコブより一箇の星いでん。イスラエルより一條の杖おこり、モアブを此旁より彼旁に至るまで撃破り、また鼓譟者どもを尽く滅ぼすべし。」(民数記略24・17)

まあ仇敵モアブですが、

「一箇の星が出る。イスラエルより一條の杖がおこる」



という。この「杖」だとか、「枝」とか、「星」とか、「岩」だとかいう言い方。これはみんな「メシヤ」と連なるところの不思議な表現なんです。「ひとすじの杖」というのはやはり牧者、牧人と関わる。「ひとつの星」は、ダニエル書にも出てきますが、また黙示録にも「<sup>あかつき</sup>暁の星」というのが出てきます。そういう意味においてちよつと不思議な言葉がここにありますから、これを覚えておくように。キリストの降誕のときに不思議な星が現れた。そういうところと関わりがあるわけです。

## ●一人の預言者

今度は、申命記にいきます。申命記18章15節。1節に、

「祭司たるレビ人およびレビの<sup>わかれ</sup>支派は都てイスラエルの中に分なく産業なし。

とある。即ち、レビ人、祭司というものは、神さまをその産業とする、分とするというようなわけです。

<sup>15</sup>汝の神エホバ汝の中汝の兄弟の中より我の<sup>ひと</sup>ごとき一箇の預言者を汝のために興<sup>おこ</sup>したまわん。汝ら之に聴くことをすべし。

「我の<sup>ご</sup>ごとき一人の預言者を汝のために起こしたまわん」

と。これは神さまの言ですから。神さまの意向を告げた言葉ですけれども。そういう「一人の預言者」という言葉が18節にも出てきます。

<sup>18</sup>我かれら兄弟の中より汝のごとき一箇の預言者を彼らのために興し、我言をその口に授けん。我が彼に命ずる言を彼ことごとく彼らに告ぐべし。」(申

命記18・1:18)

と。「ひとつの杖」だとか、「ひとつの星」だとか、「ひとりの預言者」だとか、この「一」、特定な

「二者」

です。集団的な民族としても、非常にイスラエルというのは民族的な意識が強いんですが、特にその中に「一つ」というような言い方が出てくるときには注意を要するわけです。

それから、申命記33章というのが、さっきの創世記49章と同じように、十二の族のことを書いているところで、13節から17節までずっとヨセフのことが書いてありますが、

「<sup>17</sup>彼の牛の首出<sup>うい</sup>はその身に<sup>さかえ</sup>栄光ありて、その角は野牛の角のごとく之をもて

国々の民を衝<sup>つ</sup>きたおして直ちに地の四方<sup>よも</sup>の極<sup>はて</sup>にまで至る。是はエフライムの

万々はマナセの千々なり。」(申命記33・17)

という妙な言葉がある。これもやはり力の象徴なんです、この言葉は預言としても私はあまり評価したくないですけども。



## ●キリストは天界の王者

今度は、サムエル後書7章16節。サムエル後書の6章、7章は大事なところです。ダビデのエルサレム入りのことが書いてある。7章4節からはエホバの言が預言者ナタンに臨んだところです。

「4其夜エホバの言ナタンに臨みていわく。

云々と16節まで続きます。ここはよく印しておいてください。

5往きてわが僕ダビデに言え。エホバ斯く言う、汝わがために我の住むべき家を建てんとするや。6我はイスラエルの子孫をエジプトより導き出せし時より今日にいたるまで家に住みしことなくして但天幕と幕屋の中に歩み居たり。

神さまはイスラエルの民と一緒に歴史の歩みをしてきた。それを

## 「幕屋」

という言い方で言っている。私はこういう言葉から「幕屋」ということを言い出した。神の民の在り方は、教会とか神殿ではなく、幕屋という動的な旅のすがたです。

7我イスラエルの子孫と共に凡て歩める処にて汝ら何故に我に香柏の家を建てざるやとわが命じてわが民イスラエルを牧養しめしイスラエルの士師の一人に一言も語りしことあるや。

と。神さまはそういうことは言ったわけではない。このところを読みますと、特に14節あたりから、

14我はかれの父となり彼はわが子となるべし。彼もし迷わば我人の杖と人の子の鞭を以て之を懲さん。15されど我の恩恵はわが汝のまえより除きしサウルより離れたるごとくに彼よりは離るることあらじ。

そういうように離れることはない。

16汝の家と汝の国は汝のまえに永く保つべし。汝の位は永く堅うせらるべし。」

(サムエル後7・4:16)

と言って、メシヤ、王者としての祝福をはっきりと伝えているわけです。もちろんこれは、キリストにおいては地上の王国ではなくして、キリストは天界の王者というわけですから、その伏線としてこういう言葉が読まれるわけです。

## ●神さまを義とする

今度は預言者の中にいきます。アモス書9章。この前話したときは、この預言者を中心にしてお話した。旧約聖書は何といっても預言書が一番の中心です。歴史的にいつてアモスが一番ふるいわけです。アモス書9章11節、

「11其日には



「その日」というのは終末の日、神の国の来る日です。

我ダビデの倒れたる幕屋を興し、その破壊を修繕いその崩れたるを興し古代  
の日のごとくに之を建てなおすべし。<sup>12</sup>而して彼らはエドムの遺余者および

我名をもて称えらるる一切の民を獲ん。此事を行うエホバかく言うなり。<sup>13</sup>エ

ホバ言う視よ日いたらんとす。その時には耕者は刈者に相継ぎ……」（アモ  
ス9・11～13）

神の国の自然界の様子をここに語っている。これはアモスの預言としては、果してこれがアモスの言葉であるかは学問上、問題はあるけれども。しかしながら、今、私が言おうとするのはむしろそれではない。

アモス書においてキリストの預言として我々がどうしてもとらえなければならないのは、キリストの実存、彼の霊的人格、それに預言者アモスがどのような地位をもつものであるか。むしろそういうことです。

アモスは近隣に対するところの国およびイスラエルに対するところの神さまの「審判者」としての、「ショーフェート」としての神。それをはつきりと伝える。この「審判」というのは「義」のことであります。

これからが本論となります。申し上げているとおり、神とキリスト——我々は今日はキリストと一対一の関係の祭でありますから——神とキリスト、メシヤ、この関係は第一に義であるわけです。義の関係。神さまを義とする。

神さまの意志を義いとする。神さまの意志を百%に「然り」とすることが、この義の内容です。自分はその下に、自分自身に対しては「否」として対する。プラスに対してマイナスです。あるいは

「無」

といつてもいい。これはもうさんざん『無者キリスト』で書いたので、皆さんのご承知のとおりです。自分を何ものともしない。

「神さまを百%に然りとして、全面的に神を受けとる」

この姿が義なんです。これが義人なんです。

「義人なし、ひとりだになし」

と、これを徹底的にできたのはキリストのほかにはいないという。私が全然ない。そうすると今度は、神さまの方では、それを義とするという。神を義とすると、神さまの方では、汝を義とする。

「神を義として百%に神を受けとる」

ことを「信ずる」という。信ずるとは、神がなさること、また仰ることは全部然りと——今はわからない。全然その反対に見えるかもしれない——けれども、それはもう神さまのすることは百%然りとする。いわゆる祈りがきかれようがきかれまいが、神さまのするこ



とは百%。

「祈りがきかれたからどうのこうの、きかれなかったからどうのこうの」ではない。人間の側の判断を超越した世界ですから。

「もうこの世ではてんでマイナスである。それでもわが生涯は然りであつた」というのがこの「神を義とする」ということ。

「こんな不合理なことがあるか、こんな不条理なことがあるか。それでもなお神を義とする」

と。キリストはその不条理の最大なことを彼は受けとつた。十字架です。あれだけのひとが、なぜ十字架にかからなければならなかったか。これくらい不条理なことはいないわけです。

神に対して「然り」と言つて歩く。この姿を徹底的に「義」としてとらえたのが預言者アモスです。もちろん預言者アモスは新約でいうようなほどの深みはもっていませんけれども、しかし、その縦の線を貫いたことにおいては、何といつても素晴らしい預言者です。それから外れたものは本当の世界ではないと。だから、

「神に立ち帰れ」

ということを叫んでいる。たとえば、アモス書4章6節、

「6……然るに汝ら是我に帰らずとエホバ言い給う」(アモス4・6)

それから、8節、9節、10節、11節にみんな出ている。

「汝ら是我に帰らず」

と。神から背いて出ている。

だから大事なことは、「帰入」すること、帰り入ることです。「義とする」というけれども、この「帰る」という言葉の方がなおおもしろい。

今度は逆にいうと、神さまは顧みている。

「神さまはかえりみていらつしやるから、帰りなさい。そうすると、義しい関係に入るから」

と。それがそっぽを向いているから、横向いたり、斜め見たり、自分を見たりしているのは、それはみんな義ではない。神を見ることが「帰る」ということだ。見るばかりでなくて、これは本当は、帰入、帰り入る。ここまではそこまでは、

「帰り入れ」

とまでは言っていないけれども、

「帰れ、帰れ」

と言っているわけです。この角度からそれたら、どんなに逃げたってダメだということが、9章に畳みかけて書いてある。



## ●神は夫で、民は妻

その次はホセア書。ホセア書で我々が注目しなければならないのは2章19節。

「<sup>19</sup>われ汝をめとりて永遠とこしえにいたらん。公義ただしきと公平おおよけと寵愛いつくしみと憐憫あわれみをもてなんじを娶めとり、<sup>20</sup>かわることなき真実まことをもて汝をめとるべし。汝エホバをしらん。」  
(ホセア2・19～20)

ということとは、イスラエルの民に対して神さまは夫であつて、イスラエルの民は妻である。

「お前(預言者ホセア)がその妻に対してそれだけの気持をもってもらいたい。お前の奥さんは悪い奥さんだ。ちようど、イスラエルの民が他のバアルの神々につかえて信仰的姦淫を犯しているが、それでもなお捨てな。私がお前たちを、イスラエルの民を捨てないように、不信な民を捨てないように、お前もまたその妻を捨てな」

と。こういう言葉を発して、第3章にいくと、その具体的なことが書いてある。

「エホバわれに言給いけるは汝ふたたび往きてエホバに愛せらるれども転かえりてほかのもろもろの神にむかい葡萄の菓子愛するイスラエルの子孫のごとく、そのつれそうものに愛せらるれども姦淫をおこなう婦人おんなをあいせよ。<sup>2</sup>われ銀十五枚おむぎ一ホメル半をもてわが為にその婦人をえたり。

買い戻してきた。

<sup>3</sup>我これにいいけるは汝おおくの日わがためにとどまりて淫行をなすことなく他の人にゆくことなかれ。我もまた汝にむかいて然しかせん。」(ホセア3・1～3)

この、

「我もまた汝にむかいて然しかせん」

という言葉が非常に深い言葉です。よこしまな妻に向かつて、

「まあ戻つて、そしてもう他にいくな。私もそういうようにするから。私も他にはいかないから」

と。ホセアはなにも他に行こうと思つてゐるのではない。けれども、相手の悪い奥さんと同じ角度に自分をおいてこう言つてゐる。

## ●我も汝を罪せじ

姦淫の女を、現行犯の女をキリストの前にもつてきたときに、

「我も汝を罪せじ」

とキリストが言つたでしょ。あの「我も汝を罪せじ」というのがその角度です。同じどん底に立つてその人を本当に荷なつてしまふ。これが本当の愛です。

だから、この義から背いているイスラエルは不義なんだ。不義の民だから、それでは神



さまが審けば、これはみんな滅びてしまう。だけれども神さまは、この審判の義の神は、しかしながら、それを審き滅ぼさないで赦す。これをあがなう。罪を贖った。妻を買い戻してきた。

この「贖い」という字はそこからもきている。この場合は、昔の風習で、お金や穀物であがなってきたけれども、キリストは我々の罪をそういう物品であがなつたのではない。彼自身の生命であがなう。これは犠牲の宗教ですから。

それを彼自身が――この義の姿は、神を義とするということは、羊のごとく従うということ。「義」というのは「羊の我」と書く。羊の我となることが義である――神さまにそのように従って、そして今度は、そのような疵なきキリストが我々をあがなうために、自身を、自分の生命を捨てて――「生命には生命を」というでしょ、

### 「歯には歯、目には目、命には命」

という――キリストの生命をもつて我々の生命を戻してくれた。

### 「生命には生命を」

とは、キリストはプラスの生命をもつて我々のマイナスの生命を逆にプラスにしてくれたというのが「贖い」です。

だから、義の神はただ審くのではなくして、そいつを今度は、審きは神の子をもつて審きを全部やめてしまった。ルカ伝2章のところで、シメオンが

「この民の贖いをしてくれるメシヤが現れたから、これでもう私はいい」

と言った。即ち、義と愛は神においては――神の義は同時に愛である。同時に愛をもつたもの、「与える義である」いうこと――義をもつて審くのではなくて、その義を与える。その義を与えることが愛です。

即ち、キリストの義たる実存、神に100%に従っているというその実存そのものを与えてくださる。その土台となっている永遠の生命、これを与えてくださる。贖いをもつて今度は、永遠の生命を与えるという。

このことはまた預言者の中に出てくる。だから、旧約の預言者を全部渾然としてキリストは一身をもつて満たした。これが預言の成就なんです。

アモスとホセアは、その意味において最初に出てきた預言者です。アモスは南ユダの国から現れて、ホセアは北イスラエルの国に現れた。ほとんど同時代です。ちよつとズレているだけ。ホセアの預言のあとでこの北イスラエルは滅びてしまう。そういう意味において非常に大事なわけです。

### ●ひとりの神を拝する

それからミカ書4章に「末の日に」云々と書いてある。素晴らしい預言です。3節に、

「<sup>3</sup>彼衆多の民の間を<sup>おおく</sup>鞫<sup>さば</sup>き強き国を<sup>いまし</sup>規戒め遠き処にまでも然したもうべし。彼



らはその剣を鋤に打ちかえその鎗を鎌に打ちかえん。国と国とは剣を挙げて相攻めずまた重ねて戦争<sup>いくさ</sup>を習わじ。<sup>4</sup>皆その葡萄の樹の下に坐しその無花果樹の下に居らん。……<sup>5</sup>一切の民はみな各々その神の名によりて歩む。然れども我らはわれらの神エホバの名によりて永遠に歩まん。」(ミカ4・3-5) おもしろいですね、この5節は。

「民はみな各々その神の名によりて歩むけれども、私たちはわれらの神エホバの名によりて永遠に歩もう」

と。イザヤになると、もう世界はただひとりの神になってきますけれども、預言者ミカあたりは、まだ他の神々も認めている。

いいんですよ、他の神々を認めても。それがインチキな神さまでないかぎり。神的な存在なら。今私が言おうとしているのは、そればかりではないですけれども。

モーセに現れた神さまもそうなんです。

「わが顔の前には私だけが神だよ、お前たちにとっては。他の神々は、いることはいるけれども、わが顔の前には私だけが神なんだよ」

というのが、「拝一神」、ひとりの神を拝する。他の民族の他の神々があつたって、そんなものは差し支えないではないか。それをなにも喧嘩することはない。この問題に深入りすると大変だから、今日はやめておきますけれども。私の神学になってしまいうから。

とにかく、神さまとは一対一の関係。もはや、議論ではない。本当はこの問題はおもしろいんだがね。イスラエルに現れた神さまは、民族に現れたけれども、ついにキリストにおいてはつきりと自らを顕す。預言者たちにおいて顕した。それがついにキリストという一者に、独一者に現れた。この関係は絶対的な関係なんです。対を絶するわけです。相対的な神々があるうがなろうが、そんなことは問題ではない。議論するのではない。実存的には、私にとってはこの神さまだけなんだと。他の宗教だつていろいろあるからいいじゃないか、それはみんなどれだつて。そんなものを議論したつて始まらない。

## ●無者となる

ただ、何といつても、ナザレのイエスに顕れたところの神さまの絶対性というものは、これに深く入れば入るほど限りないということが、我々にとっては実際に死に至るまで、いや死を越えてまでも進んで行こうという、そういう深い無量の関係ですから。我々はとにかくこの超越者、絶対者、このヤーヴェの神さまだけでいいんじゃないかと。

ミカは、やはりアモスやホセアの義や愛の関係において、また別な角度からはつきり言っている。それがミカ書の別なところに出ている。6章8節、

「<sup>8</sup>人よ彼<sup>ただしき</sup>さきに善事<sup>よきこと</sup>の何なるを汝に告げたり。エホバの汝に要<sup>もと</sup>めをたもう事は唯正義<sup>ただしき</sup>を行い憐憫<sup>あわれみ</sup>を愛し謙遜<sup>へりくだ</sup>りて汝の神とともに歩む事ならずや。」(ミカ



## 6・8)

というこの8節。これは大事な節です。

「善事……は唯正義を行い憐憫を愛し謙遜りて汝の神とともに歩む事ならずや」

と。神さまとの関係を義しくして、そこにおいて行動することが「正義を行い」です。これは「正義」と訳してはダメなんだ、本当は。「義を行い」といった方がいい。義を行ずる。この義の関係を実存的に現すことが「義を行い」です。だから、アモスに現れたことを本当にそのように生きること。「憐憫を愛し」とは、ホセアにおいて現れた、自分を捨てて本当に相手を荷ないあげるような愛。相手を審かない。これが「憐憫を愛し」ということ。だから、アモスとホセアがそこに出ている。そして「謙遜りて」と書いてある。この「謙りて」がミカ書の大事なところですよ。これが

「無者となる」

ことです。これは神さまの前に本当に平伏している。平伏して、無者となって、

「汝の神と共に歩むことならずや」

と。そうしたらば、神と一緒に歩む。共在です。今日の祈祷会の題に「インマヌエル」と書いたのがそうです。

「神われらと共に」

という。神われらと共にという「共在」です。

ミカ書の「ミカ」というのは「誰か如き」という字です。「誰か神の如きものあらんや」というのが「ミカエル」という。「エル」は「神」。「誰か神の如くあらんや」という、その「神」だけ取ってしまったのが「ミカ」という名前です。

「汝の神と共に歩む」

という。共に歩むことはいかにして可能かというと、平伏していなくて。へりくだり、平伏していくところに本当に「共にあり」ということができる。

意志の強い人は――たとえばあのパウロなんかそうなんだ、意志が強い――なかなか謙らない。それだから、「我が義」なんて言って、「責むべところなし」なんて言って威張っていたわけだ。パリサイ中のパリサイ。どんなにそれが義しようにみえても、高慢なのは一番サタンに近いから。これがキリストにひっくり返された。どこが悪いではない。行為が悪いのではない。そのすがたが悪い。神さまの前に自分を主張して、「我こそは」というのがわるい。本当の「我こそは」というのは、

「キリストという我こそは」

なんです。

●「我を視よ」

だから、そこに謙って、キリストにひっくり返されたパウロは、



「我を視よ」

と言えた。ペテロもヨハネも、あの「我を視よ」というこの「我」は、

「わがうちなるキリストを視よ」

ということ。自分が本当のぶつつぶれていなければ、「我を視よ」ということは言えない。

ニーチェが、『エッケ・ホモ』という本を書いた――あのニーチェという奴はちよつと高慢な野郎でね――これは聖書の中に出てくる言葉で、「この人を視よ」という。「この人を視よ」というのはニーチェ自身が自分のことを書いている。なかなか、愉快と言つてはおかしいけれども、おもしろい本です。けれども、これは「この人を視よ」と読んではいけない。

「視よ、この人」(Ecce homo)

ということ。

「これが本当のその人だ。これがその人なんだよ」

という、ピラトの前のあそこのところ。「この人を視よ」ではない。「視よ、この人」ということ。私たちが「視よ、この人」と言えるときには、

「わがうちなるキリスト」

という「ひと(ホモ)」なんです。

神と共に歩む。一緒に歩く。どこまでも一緒に歩く。だから、孤独ではない。単独であつても孤独ではない。我々は単独者である。本当の意味で単独でなければダメですよ、キリスト者は。本当の単独者は、

「キリストと共にある共在者」

なんです。その共在者がたくさん集まるところに本当にエクレシアになる。キリストとの共在がなくて、「エクレシア」なんて言つたつてダメですよ。そんなのはクラブだ、人間相互の集まりなんてものは。そしてワツシヨイ、ワツシヨイとやつたつてダメです。どこまでもこの角度がちゃんと立っていないくは。

### ●キリストは我らの義

それから今度は、エレミヤにいきましょう。23章5節。

「<sup>5</sup>エホバいいたまひけるは、視よわがダビデに一の義<sup>ただ</sup>しき枝を起こす日<sup>きた</sup>来らん。

またここにも「義しき枝」と書いてある。そもそも、「義しき枝」なんて妙な言い方です。

彼王となりて世を治め栄え公道と公義<sup>おおよけ</sup>を世<sup>ただしき</sup>に行うべし。<sup>6</sup>其日ユダは救<sup>すくい</sup>をえ

イスラエルは安<sup>やすき</sup>に居らん。其名はエホバ我儕<sup>われら</sup>の義と称えらるべし。」(エレミ

ヤ23・5〜6)

これは非常に大事なことです。

「その名は我等の義と称えらるべし」

と。「エホバは我らの義」だけれども、



「キリストは我らの義」

なんです、我々にとつては。「一つの義しき枝」、これは「キリストは我らの義」キリストは私たちの義なんです。キリストは私たちの愛なんです。キリストが主語ですよ。

プロテスタントが「信仰によつて義とされる」という。もちろんこれは正しい言葉なんだけれども、それが観念化してしまっているから、しょうがない。キリストを本当に100%に受けるところに、そのキリストの義が私たちの本質となるわけです。キリストの義が本質となるということは、本当に神を100%にして生きることになる。神を義とする生き方、また神を愛とする生き方。これは離すことができない。

「二つの枝が起きて、それは我らの義と称えられん」とは愉快な言葉です。

### ●溶け込みを一如という

それから、これはちよつと余談だけれども、そこにおもしろい言葉があるから、紹介しておこう。9節、

「9 預言者輩のために我心はわが衷に壊れ  
これは偽りの預言者です。」

わが骨は皆震う。且つエホバとその聖言のためにわれは酔える人のごとく  
酒に勝たるる人のごとし。」(エレミヤ23・9)

こういうことを言うんだ、

「神さまの言で私は酔っています」

と。「酒に勝たるる人」、酒に酔っているようにと。酒に酔うことは決して結構なことではないですよ。キリストだつて酒を飲んだけれども、キリストは酒に勝たれなかった。神さまの言には勝たれていいわけです。神さまの言や神さまの行為、キリストの言やキリストの行為には、もう酔ってしまつてね、その中に入つてしまう。溶け込んだらいいです、その中に。溶け込みのひとにならなければいけない。溶け込みのひとに。

今ここでキラキラと光っているね。この空気は、この空気の中に光が溶け込んでいるでしょ。光が溶け込んでいる空気――闇が溶け込んでいる空気は困るよ。それはサタンの世界――しかし、光が溶け込んでいる空気は本当に明るい。塩が溶け込んでいる水、海水は塩辛い。これは人の身体にも結構。

私はプールで泳ぐのはきらいなんだ、海で泳ぐ。波があればあるほどと言つたらちよつと大袈裟だけれども、波があつた方がおもしろい。波に溶け込むんです、泳ぎの秘訣は。波を恐れたり、波を避けようとしたら、本当の泳ぎにならない。波がくれば、波となるんです、こつちが。

そういう角度がみんなこの溶け込みの実存なんです。そういう溶け込みを「一如」という。



信仰の本当の世界は、もう私は一言でいうと、この

「一如」

という一言に尽きると思っている。「共在」なんて言っているのはまだダメなんだ、本当はこの

「一如的神秘」

の世界です。それを無教会は嫌うんだ、「神秘」や「一如」なんていうと。

「我々罪びとが一如になれるか」

なんて、すぐそういう角度からいう。キリストは一如になりたくてしょうがないんです、この罪びとと。罪びとの中に入ってくる。

### ●現代のキルケゴール

もうちゃんちゃらおかしいよ、いろんなことをゴタゴタゴタゴタやっているのが。まだみんな自分がたっているからです。自分の判断だとか、自分の信仰だとか、自分の実存だとか。そんなことを問題にしているうちは、いつまでたっても始まらない。もう私はこの第3巻の『無の神学』(1982年刊)を早く書きたくてしょうがない。世界にうったえてやるから。

私みたいみなこんな素人でね、牧師でも何でもない、しょうがない野郎だ。そして、「しょうがない野郎だ」なんて言って、みんな捨てて出て行ったひとがある。勝手に捨てやがれと。私はキリストには捨てられんです。だから、何と思われようと、痛くも痒くもない。

むしろ、本ものはみんな捨てられていく、大体、本ものは。キルケゴールなんていうのも、その当時にはわからなかった。キルケゴールが死んで約一世紀近い。やっとバルト、ブルンナーあたりが新しく見返した。そんなもんですよ。

私は現代のキルケゴール、ニーチェとなつてやるから。いや、キルケゴール、ニーチェ以上のものに。まあ見ていてくださいよ。

「先生は、あんな約束ばかりして、しょうがないな、空約束、空手形で」

なんて。空手形は一番困るよな。

私は、いわゆる天才でもなければ、秀才でもなければ、一番ダメのカスだ。ダメのカスといえば、あのアインシュタインは小学校のときに先生に見離されたような子どもだった。アインシュタインの伝記にも出ている。

「あれはもうしょうがない」

と。それから、大学の試験にもいっぺん落っこちた。そういう、いわゆるこの世の評価には落第生みたいなもの――漱石もそうだよな、数学ができなくて――ところが、アインシュタインはどうですか、世界のいかなる数学者もかなわない。アインシュタインの相対性理論というのは大変なもんだよな。ヒットラーがユダヤ人を迫害しなかったら、ドイツは



勝ったね。ドイツで先に原爆ができてしまう。とにかく、ユダヤ人というのはすごいのがいるよね。何といたって、キリストを出したユダヤ人だから。

皆さん、我々には賜りたるいろいろな素質がある。才能がある。しかし、それはみなまだ相対的なところですよ。そいつが或る絶対的な質をもつためには、絶対にこの聖霊が来なければダメです。だから、聖霊のバプテスマを本当に求めなさいと。

今のキリスト教界は何ですか、いったいこれは。立派な学者はたくさんいるよ。だけれども、本当に聖霊の器が少ない。むしろ、カトリックの伝統の中に素晴らしい人がいました。プロテスタントにも少しはいました。けれども、頭の宗教に切り替わってしまった。力がない。魂の世界はごまかしがきかないから、本ものが来ているか来ていないかは自分でわかるです、はつきり。本ものが来ているからといって、すぐそれが何か聖人君子になるというようなことではないけれども。

預言者たちはその本ものに火花を散らしていた。そのうちに今度は本ものが現れてきた。だから、このキリストの降誕というのは、本当に預言の成就として、私たちは本当に素晴らしいことだと思うわけです。

### ●涙の預言者エレミヤ

「我らの義」というけれども、エレミヤというひとはしかし、心の預言者です。本当に深い心の、涙の預言者です。20章7節、

「7 エホバよ汝われを勧めたまいてわれ其勧めに従えり。汝我をとらえて我に勝ち給えり。われ日々に人の笑いとなり人皆我を嘲りぬ。」

「あなたが勝つて、あなたに捕まえられたら、私はひとに嘲られるようになりました」

と。まさにキリストがそうです。これを読むと、キリストがはつきりとそのような人物であつた。キリストは神さまに勝たれた、完全に勝たれたひとです。父に参ってしまつた。

8 われ語り呼ぶるごとに暴逆残酷の事をいう。エホバの言日々にわが身の恥辱となり嘲弄となるなり。9 是をもて我かきねてエホバの事を宣ず又その名をもてかたらじといえり。然れどエホバのことば我心にありて火のわが骨の中に閉じこもりて燃ゆるがごとくなれば忍耐につかれて堪え難し。」(エレミヤ20・7-9)

神さまの言がもう私の心に、また骨に燃えついてしまつて、これを言うのをよそうと思つても爆発してくると。こういう文字を読むと、さっきの

「神さまの言に酔っている」

とか、あなた方、こういうところを読んだら、冥想してすぐその世界に入らなくてはしやうがないですよ。

もうひとつ大事なところ。エレミヤ記14章7節、大好きなところだ。



「7 エホバよ、我儕<sup>われら</sup>の罪<sup>つみ</sup>われらを訟<sup>あかし</sup>えて証<sup>あかし</sup>をなすとも、願<sup>ねが</sup>くは汝<sup>きみ</sup>の名<sup>な</sup>の爲<sup>ため</sup>に事をなし給<sup>たま</sup>え。我儕<sup>われら</sup>の違<sup>ちが</sup>背<sup>へ</sup>はおお<sup>おほ</sup>いなり。我儕<sup>われら</sup>汝<sup>きみ</sup>に罪<sup>つみ</sup>を犯<sup>か</sup>したり。8 イスラエルの企<sup>のぞ</sup>望<sup>み</sup>なる者<sup>もの</sup>その艱<sup>なやめ</sup>るときに救<sup>すく</sup>いたもう者<sup>もの</sup>よ、汝<sup>きみ</sup>いかなれば此<sup>この</sup>地<sup>ち</sup>に於<sup>お</sup>て他<sup>ほか</sup>邦<sup>くに</sup>人<sup>びと</sup>のごとくし、一夜<sup>やどり</sup>寄<sup>たび</sup>宿<sup>と</sup>の旅<sup>たび</sup>客<sup>きやく</sup>のごとくしたもうや。9 汝<sup>きみ</sup>いかなれば呆<sup>あき</sup>れておる人<sup>ひと</sup>のごとくし救<sup>すく</sup>をなすこと能<sup>あた</sup>わざる勇<sup>ゆう</sup>士<sup>し</sup>のごとくしたもうや。エホバよ汝<sup>きみ</sup>は我<sup>われ</sup>らの間<sup>うち</sup>にいます。我儕<sup>われら</sup>は汝<sup>きみ</sup>の名<sup>な</sup>をもて称<sup>ほめ</sup>えらるる者<sup>もの</sup>なり。我<sup>われ</sup>らを棄<sup>す</sup>てたもう勿<sup>な</sup>れ。」(エレミヤ14・7〜9)

「私たちはしょうがない野郎ですが、聖名のゆえに棄てないでください」

と。もう何ともいえない切々たる祈りです。この

「聖名のゆえに、汝のゆえに」

というのが、キリストの全き角度なんです。

「汝の御意をなさせたまえ。聖名をあがめさせたまえ」

と。聖名を聖とする。そういう角度で、同じことが14章19節から22節まで書いてあります。ちゃんとラインを引いておきなさいよ。聖書は、自分の生命がそこにつながっているようなことにならなくては。聖書は、学ぶのではない、食べるんです。聖書と一如の世界になる。

「聖名のゆえに救ってください。聖名のゆえに忘れてください。聖名のゆえに赦してください」

と。全部、

「あなたの聖名のゆえに、聖名にあつて」

と。これが本当に自分をぶちまけているひとの言葉、祈りなんです。

そうすると、本願が聞こえてくる。神・キリストの本願が。自分の悲願ではない。どうなってもいい。そのかわりもう必ず成つていく、本願は必ず成就する——どこでぶつ倒れてもいい、いくら未完成でもかまわない——天界において。

### ●甦りの生命を与える

今度はエゼキエルに行きましょう。エレミヤの後でこのユダの国も滅びてしまった。エゼキエルは捕囚の預言者です。バビロニアに捕囚されたときの預言者。どういう運命環境になつても、イスラエルの歴史はこの預言者たちの深刻な破れの現状において最も素晴らしいものが現れてくるとは何ごとか。いかに彼らの宗教が御利益宗教でないかということがわかる。いわゆる幸福を望んでいる宗教ではない。

どんな運命環境になつても、いやダメになればなるほど、行き詰まれば行き詰まるほど、もの凄いものが出てくる。そうならなければ、何が信仰かと。一如の世界に入ったら必ずそれが成つて行くんです、一如の世界に入っていれば。

「一切の秘訣を得たり」



とパウロが言ったのは、そのことなんです。

全くもう言葉にならんよ。エゼキエル書17章22節から、

「22主エホバかく言いたもう、我高き香柏こうはくこすえの梢こすえの一を取りてこれを樹え、その芽いただきの巔たかやまより若芽を摘みとりて之を高き勝れたる山に樹ゆべし。23イスラエルの高山たかやまに我これを植えん。是は枝を生じ果をむすびて栄華さかえなる香柏となり諸もろもろの類の鳥皆その下に棲すまいその枝の蔭に住まわん。24是に於て野の樹みな我エホバが高き樹を卑ひくくし卑き樹を高くし、緑なる樹を枯らしめ枯木を緑ならしめしことを知らん。我エホバこれを言い之を為すなり。」(エゼキエル 17・22〜24)

「あらゆる価値の転倒」(ウムヴェルトング アッラー ヴェルテ)

という言葉がある。これはニーチエの言葉だよ。

「本当のひっくり返りが来るぞ」

と。そういう不思議な預言がここにある。あまり普段は気がつかないところだ。これも、

「梢こすえの一を取りてこれを樹え」

という。挿し木みたいなものだ。

このエゼキエル書には37章に有名な枯骨の復活のことがありますが、これは

「イスラエルの民がやがてまた復活するぞ」

という、民族的な復活のこともあわせて預言しているわけです。しかし、神の霊のあるところには、私たちの相対的なこの肉体の滅びも、それは相対的な滅びにすぎないので、永遠の生命はみたまと共にくるという。キリストが復活の生命をもつて証明したのが、このエゼキエル書37章の、個人的な一番集約された実証であるわけです。贖いを通して甦りの生命を与えることをまたエゼキエルを通して預言されているわけです。

### ●聖者となづくるもの

その先は何といつてもイザヤ書ということになる。まだ他の預言者もありますけれども、それは今日は略します。イザヤ書9章6節、

「6ひとりの嬰兒みどりこわれらのために生れたり。我儕はひとりの子をあたえられたり。政事まつりごとはその肩にあり、その名は奇妙また議士また大能の神とこしえのちち平和の君となえられん。

「大能の神」「とこしえのちち」「平和の君」と畳みかけて書いてある。「平和の君」のもととは「平安の君」です。神にして父にして、平安を与えるところの君である。王であると。7節に、

7……万軍のエホバの熱心これを成したもうべし」(イザヤ9・6〜7)

と書いてある。非常に力強い言葉です。「熱心」は「妬み」という言葉ですけれども、エホバの愛がこれを為す。これはまさにキリストそのものの預言みたいな言葉です。そういう



ひとが現れるという。

「ひとりの嬰兒<sup>みどりご</sup>われらのために生まれたり」

という。もうこういうことはみんな『無者キリスト』(第一巻)の最初の第一章のところに書いてありますから。

預言者イザヤは神さまのことを

「<sup>しやうじや</sup>聖者」

と言いました。「聖なる者」「コーデーシュ」。莊重なそして相對界を絶したものが聖者です。

「神の名を聖とせよ」

というのが、「聖名をあがめよ」ということ。

「聖書」とか、「神聖」とかいふ。この「聖」という言葉が、へたすると、冷たく感ずる。けれども、この「聖」は熱いんです。聖光、みひかり、光を思うことが一番いいです、この「聖」の中には。光は熱いですから。そして非常に生命的である。そういう内容をもっている。

光に対しては闇、暗黒だ。暗黒、汚れ。まあ日本の宗教でも、すぐ潔めとか汚れとかいうことが出てくる。これは相当、外側の氣持がかなり加わっているけれども、聖書のこの「聖」という字はもつと内容が靈的に厚みをもっています。

そのことは、「聖者」はどういうことかというところ、第三イザヤにくると、57章15節に、

「<sup>いと</sup>至高<sup>とこしえ</sup>く至上なる永遠にすめるもの<sup>せいじや</sup>聖者となづくるもの<sup>かく</sup>如此<sup>かく</sup>いい給う、

至高者にして永遠者であり聖者であるところの神さまはこう仰ると。

我はたかき所きよき所にすみ、亦こころ碎けてへりくだる者とともにすみ、

謙<sup>へりく</sup>だるものの靈をいかし碎けたるものの心をいかす。」(イザヤ57・15)

これは聖書の中で私の大好きな句の一つです。即ち、聖者は心碎けて謙る者、平伏す者の中にやってきてその靈を活かす、その心を活かすという。

キリストという聖者は自らを高くしていましたか。あれは遊び女だの取税人だの、いろいろな身体障害の人たち、そういう人たちのところへ近づいてきた。そしてそれらが実は神の国を築く土台であるというわけです、みんなが棄てるような人たちが。だから、これが価値の転倒です。いわゆる立派な人、いわゆる学問のある人、いわゆるゆる何とかという、この世のエリートなんか大して問題にしていない。パウロもコリント前書1章で言っているとおろ、

「弱き者、無きがごとき者がよろしい」

と。相對的に善いとか悪いとか、きれいだとかきれいでないとか、利口だとか馬鹿だとか、強いだとか弱いだとか、尊いだとか卑しいだとか――それもいいですよ、相對的な判断が多少あったって――けれども、そんなものに囚われているうちはダメです、それを乗り越えてしまわないと。



## ●聖者の本願

神の国におけるところの民は、そういった相対的な判断からもうひとつぬけて――いろいろあるよな、四角いのも三角のも星の形も丸いのも、何だかわけのわからない形のも。みんなあなた方はこういうものだ、どれだかしらんけれども――どれだつて、相対的に比較したつてしょうがない。それで、いいのわるいの何のかんのと云っているのが人間の世界だよな。けれども、この四角の中に、この三角の中に、この星の中に、この丸の中に、このわけのわからない形の中に、ここに本ものを受けとるかどうかが問題なんです。そうすると、みんなこれが素晴らしい四角になるし、素晴らしい三角になるし、星になるし、丸になるし、わけのわからない形になる。

まあそこまで来なくても、人間には天から定められたものがあつて、人間はみんな天下一品です。だから、私は学校の成績でもって人間を判断するのはきらいだ。そんな紙の答案でもって人間なんてものはわかるものではない。みんな天下一品です。みんなそれぞれ善さをもっている。どんな悪い犯罪人も実は善さがあつた。その善さを消してしまったからいけない。神さまはみんな天下一品につくっている。この天下一品を自分で自覚して、ここに絶対的なものをいただくことだけです。これが大事なんです。そうすると、これが大きなハーモニーになる。全部、実存をもつて神さまを讃美することになる。これは全体主義ではないですよ。交響楽みたいなもの。人間のからだと同じです。

「身体には目があり鼻があり、足があり手があり云々」

とパウロが言っているとおりの。どれもものつびきならない存在なんです。

日本の試験制度はよくないね、本当に入学試験は。みんなそれぞれ自覚して、それにそつて力一杯の勉強の仕方、歩き方になれば、素晴らしい日本になるんだけど、「大学卒」なんてくだらないことばかり言っているものだから。大いに反抗して大学なんかやめてしまつて、どこかへ弟子入りした方がいいくらいだよ。

とにかくいつも、相対的な世界にしながら絶対的なところに自分を置いていないことには行き詰まりをきたします。また本当の意味において神さまが期待するところの本願がその人に成就しないことになる。それをやっていけば成就していく。未完成の完成ということになる。

だから、この聖者はそういうところに降つてきて、みんなそれをもの凄いの仕上げていく。そういう熱いものが本当の聖者の世界。神的なものにするということです。聖者は私たちを本当に神的なものにしようとしているのが、この聖者の本願であります。いいですね。ただ私たちを聖人にするなんていうことではない。「聖人」なんていう言葉は躓きになるから、よした方がいいね。聖人だとか、聖徒だとか。私はこんな言葉はあまり好きではない。カトリックでは「聖徒」なんてやっているけれども、あんな区別はしない方がいいよ。そういった意味で、イザヤ書57章15節のような、もの凄いいことになるです、その



人が。

### ●日本の一流の坊さんたち

日本の一流の坊さんたち、法然上人なんてのは本当に如来と一如となっているような人物だよな。彼もよく日本中を行脚しました。キリストと同じように喉が渴きました。そうすると、女の人に

「水を飲ませてくれませんか」

と。そうすると、遠くへ行つて水を運んでくる。

「たいへんですね」

「この所は水ができません。出てもこの水は飲めないんです」

と言うと、法然は杖でもつて地面を叩く。そこから清水が湧いてくる。これは伝説ではないですよ、本当ですよ。これは。彼が本当に如来と一つに聖者になっていれば救いをもたらす。深い愛をもっている。取り澄ました清きなんというものではない。これが本当の聖者です。

日本の一流の坊さんたちがやはり、仏の世界で「南無阿弥陀仏」、「南無妙法蓮華経」の世界で一如の世界に入っているから、こういうことになった。私は無条件に敬意を表します。

「キリスト教でなければいけない」

なんて、そんなくだらないことは言わないよ、ぼくは。

「どの世界でもいいから、本当に本ものの世界に入ってください」

と言う。

「私は小池先生のところで二、三回話を聞いたたら、仏教の本当の世界がわかって、禅宗で、また浄土真宗でえらいことになりました」

という人がもしあったとするなら、私は大いに「そうだ、そうだ」と言つてやりたい。人間の側から概念的に規定して、「これが本ものである」なんて誰が言うか、とんでもないと。そういうことでございます。

### ●聖霊がくる約束

第三イザヤが出てきたから、ついでに言っておきますが、59章21節、

「<sup>たまわ</sup>21 エホバいい給くなんじの上にあるわが霊なんじの口におきたるわがことは  
<sup>とこしえ</sup>は今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔<sup>すえ</sup>の口より汝のすえの裔の口より  
りはなれざるべし、わがかれらにたつる契約はこれなりと此はエホバのみこと  
とばなり。」（イザヤ59・21）

これは聖霊のこと。

「聖霊はやがて来るが、これは約束したぞ」

と。キリストを通してこの聖霊がやってきた。キリストが私たちにくださった最大のもの



はこの聖霊です。それも地上ではキリストはくださらなかった。十字架の贖罪を通じて天界へ昇ってからです。

あなた方は特別集会でもってひっくり返ったりする。もう大体みなさん、京都にいる人たちもみんなそうだ。特別集会でひっくり返った人がほとんど。それは聖霊のバプテスマを受けるわけです。私は何もバプテスマをしようなんて思っただけでやしない。神さまがなさるだけのなし。人間がしようなんてダメなんだ。

### ●キリストへの預言

もう申すまでもなく、第二イザヤのあの「エホバの僕」のところがキリストへの預言の最終のところ。しかも、その預言の中で一番のところはイザヤ書53章。3節、

「<sup>3</sup>かれは侮<sup>あなど</sup>られて人にすてられ悲哀<sup>かなしみ</sup>の人にして病患<sup>なやみ</sup>をしれり。また面<sup>かお</sup>をおおいて避<sup>よ</sup>けることをせらるる者のごとく侮<sup>あなど</sup>られたり。われらも彼をとうとまざりき。

<sup>4</sup>まことに彼はわれらの病患をおい我儕のかなしみを担<sup>お</sup>えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。<sup>5</sup>彼はわれらの愆<sup>とが</sup>のために傷つけられわれらの不義のために碎かれみずから懲罰<sup>こらしめ</sup>をうけてわれらに平安<sup>やすき</sup>をあたう。そのうたれし瘡<sup>きず</sup>によりてわれらは癒<sup>な</sup>されたり。<sup>6</sup>われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。」(イザヤ53・3〜6)

十字架であります。贖罪の十字架のキリストの預言ここに極まる。何といっても、この十字架が土台ですから。キリスト教界ではみんなこの十字架の印をしているんだけど、イエスの降誕は、この私たちの罪を負い、赦し、すつとぼしてしまふ。相対的な我々がどうであろうと、

「そんなことは問題じゃないぞ。この私を受けとりなさい」

と言って、その贖いの十字架の、即、聖霊をくだすところの聖霊の世界が、聖霊の光がやってくる。そして、私たちの中にキリストの霊が内住したもう。そして私たちはキリストと一如になるというすがたは――

「我々もキリストと同じになつた」

ということではない――この罪びとの中に本当に道が十字架において開かれて、そして御霊が宿<sup>す</sup>つてくださつて、そこで本当に一如になりましたという、恩恵の一如です、恵みの一如です。

「自分の信仰が立派になつたので一如になりました」

なんて、冗談いうなど。どこまでも平伏しです。聖霊すら私してはいかん。

「わがうちなるキリストに対する畏敬の念」



という。一如とこの畏敬とは矛盾しない。わがうちなる聖霊のキリストに対する畏敬の念をもつて一如になる。どこまでも平伏して、自分は何ものでもない。罪びとにすぎない。傲慢になりえない。なつたら、これは抜けてしまうから。傲慢になつたら、これは抜けてしまう。ヘタするとサタンの霊と切り替わってしまうから、とんでもないはなしだ。だから、

「信仰的英雄」

とか何とかいうのは嫌いだよ。本当の英雄は、英雄に絶したところにある。こひつじ 羔が獅子である。獅子が羔ではない。獅子だの驚だのという動物は私はあまり好きではないけれども。

「われ弱きときに強し」

とパウロが言った。

「われ無なるときに無限無量なり」

というのがキリストである。イエス・キリストはまさに無即無限無量のかたです。預言者たちの全預言が全部、キリストにおいて集中し、それから彼らの預言を突き抜けて、溢れ溢れているような実存がこのナザレのイエス・キリストです。

そういうことで、イエス・キリストを私たちの中に今日迎え入れるとは、御霊のキリストを私たちの中に迎え入れる。それが本当の降誕なんです。我々におけるキリストの降誕とは、神の言であり、神の行為であるキリストそのものが御霊において宿りたもうこと、生まれたもうこと、迎えたてまつること。我々が即ち馬槽となつて入れたてまつることがこの私たちにとつてのクリスマスの真義であります。

なお、この預言者の言葉は限りないから、もつともつと学びたいですけれども、時間ありませんし、これで終わります。

## ●祈り

昔いまし今いまし後必ず来たり給う主イエス・キリストさま。今年1977年は、その春箱根において特別な聖会をもたせられ、また夏は鹿沢においてあのような聖会をたまわり、また秋には京都大和屋旅館においてあのように恵みにあずかり、今またここに最後の集会として降誕節を兄弟姉妹たちと迎えました。この恵みの一年、本当に御前に平伏して感謝いたします。

私たちの側のかかわらず、あなたは恵みをもつて恵みより恵みへと追いかけてくださり、また力より力へとあなたの力を私たちにくださり、生命より生命へとあなたの、活けるキリストさまが私たちの中に生きてくださり、限りなく進ましめられることを感謝いたします。

「昨日も今日も永遠に我は進み行くなり」

と。来年は午の年を迎えますが、「鞍上人なく鞍下馬なし」というように、人と馬とが一如となつて、邁進、猛進、躍進いたしますが、そのような年でありますように。私たちのこ



の事態が、イエスさま、あなたを先頭にして、この一如の躍進をしていくことができますように願いたてまつります。

そのような意味において、このクリスマスをおのように迎えまして、あなたの預言者たちが本当に歴史を通してその生命、血、涙をもつて書いたところの預言の文字の一端に触れ、その火花に散らしめられて、私たちはこの時を迎えたことを感謝いたします。一切の預言者たちを通してのあなた御言が、御霊がイエス・キリストにおいて充滿し、また溢れに溢れました。そして、キリストさま、あなたは本当に無限無量な力で表現を絶したかたであることを、いよいよ私たち全身をもつて受けとり、そして進んで参ります。

人間なんぞや。そんなこと、毀誉褒貶は問題ではありません。私たちは本当に人をどんな底から助けていくことができるように。使徒たちは、また世々の本当の聖徒たちが人たちを助けました。そのようにあなたの御言、御霊をもつて人を助け、甦らせ、あなたの世界に入れることができますように。いや実に、一人びとりはそれができます。あなたがいらつしやるからです。私たちの側の何ものでもありません。そのときにあなたは本当に働きたもう。どうぞ、そのことを本当に一人びとりがこれから捨て身になって体験し、聖名をたたえていくことができますように願ひ奉ります。

本当にあなたに即することがどんなに、「御国を来らせたまえ」、いや実に、御国は私たちを通して、「汝らを通して来らしめる」との、このご期待に、神さま、本当に力のゆえに沿うことができることを信じて感謝いたします。この日本の国は実に八方塞がり、もはや希望がありません。しかしながら、希望は上からきます。どうぞ、この兄弟姉妹たちとおし、ジリジリとあなたが展開してくださいますように。

今日もたれるところの京都のO君の集会、またその他の方々でもたれているところの、知ると知らざるところにかかわらず、それらの集会においてこの降誕節がいわゆるお祭ではなく、本当にイエス・キリストが私たちの懷に生まれたまえりとの事態をもつて進むことができますように願ひ奉ります。

また本当にありがとうございます。兄弟姉妹たちの、来れなかったのもありますが、どうぞ、それらのところにおいて、キリストを本当に迎え奉りて、新しき光を、新しき生命を、新しき希望を受けとることができますように。

「御意をなさせたまえ」とは、実に全存在をもつてあなたの前に投げ出すことであることはいよいよ知りまして感謝いたします。

あなたが私たちの中にきたりたもうところに、もはや一切の勝利があることを思い、こんな嬉しいことはありません。いつたおれても、アーメン・ハレルヤであります。どうぞ、兄弟姉妹たちをそのようにしていいよあなたのものとしてください。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれとともに聖名により献げ奉りる。アーメン！

